

東園寺中興開山

曹源和尚伝



松巖山 東園寺沿革

多賀城の出城駒犬城跡にあり、大林茂禪師を開山とし、もと建長寺派に属した。寛文年間（一六六一―一六七三）荒廃した寺域を享保二年伊達綱村公（肯山公）が中興開基となり曹源禪師（勅謚神通妙用禪師）が中興開山して復興し臨濟宗妙心寺派に属した。

慶応三年（一八六七）二月六日塩釜大火で全寺域を焼失、十五代玄真和尚が明治六年仮本堂兼庫裡（二十五坪）を建立した。昭和六年、十六代秀峰和尚が玄真和尚の志を継ぎ、東北地方最初の鉄筋コンクリート桃山式御堂造りの本堂を再建、昭和九年、新本尊釈迦如来を奉迎した。昭和五十二年七月、仏舎利殿、祖師堂、檀信徒祖靈堂を併せた三重宝塔、教化センターを新改築し全寺域を復興した。

現在境内、墓域、その他寺域五千坪。教化事業に塩釜中央幼稚園を昭和四十二年十二月、学校法人東園寺学園第二中央幼稚園を昭和五十年十一月に創立。寺域に東園寺碑、焼死塔、万霊塔、駒犬城碑及び塩釜港恩人、伊達綱村公の霊牌が安置されている。



東園寺中興開山

曹源和
尚
伝

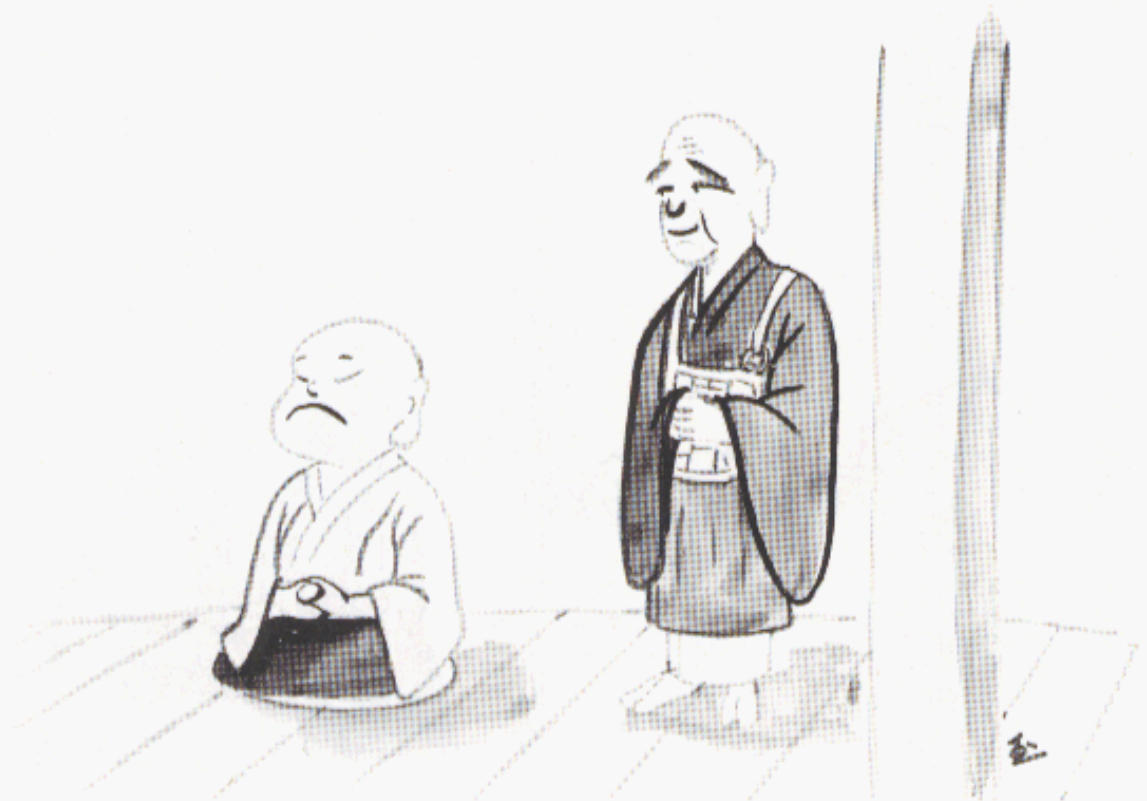
平野宗淨
訳

挿絵・長門義明

小僧の頃

東園寺の中興開山である曹源祖そうげんそすい水和尚さまは、別号を一滴軒いつてきけんといい、東奥州（宮城県）松島の出身である。

元禄十五年（一七〇二）十月五日、すなわち達磨忌の日（達磨さまの亡くなられた日）、桜井家に生まれられた。小さい時から子供達と遊んでいても抜群の子であった。七歳になった時、両親は松島の天麟院てんりんいん住職である燈外和尚とうがいのところへつれて行き、出家、得度とくどさせた。成長するにしたがい、志操堅固しそうけんこでよく學問に励み、数年間、燈外和尚の膝下に親しく随待した。



曹源さまの風貌は変っており、頬がふっくらとして眉が薄く、額が広く、両耳が肩まで垂れるほど長く、ちょうど中国の老子によく似ていたようである。また生まれつき、なまぐさいものが嫌いで、わずかな時間でも坐る時には、背中をまっすぐにして坐った。

ある時、陽徳院（松島瑞巖寺山内）の定岳和尚（じやうがく）という老師が、この若き日の曹源さまを大変ほめられ、

「まるで臨済宗の麒麟（きりん）（傑出した人物のこと）じゃ、将来わが宗門を興隆してくれるのは、この小僧にちがいない」

といわれたが、この予言は後にぴたりとあたることになる。

雲水の修行

曹源さまは十七歳の時、修行のために諸国行脚（あんぎやく）を志した。まず江戸の東禪寺（とうぜんじ）に卍庵和尚（まんなん）を訪ね、禅学を学んだが、しばらく滞在してそこを去り、下総（しもとうさき）（今の千葉県北部と茨城県の南部）の光福寺（こうふくじ）に定山和尚（じやうざん）を、また駿河（すまが）（今の静岡県の中央部）の清

見寺に陽春和尚をそれぞれ訪ね、参禅をして宗旨を学んだ。

その後、豊後（今の大分県）の多福寺に西江和尚を訪ねた。西江和尚は曹源さまに会うと、すぐに参禅を許し、修行者の筆頭に任じた。曹源さまはその頃、古月禅材という和尚が当時最もすぐれた禅師であるといううわさを聞き、すぐに旅立ちをし、野宿などを重ねながら日向（今の宮崎県）の大光寺に住んでいる古月和尚のところへたどりついた。そして日夜研鑽に励み、寝食を忘れるほどであった。そのように古月和尚のもとで刻苦修行すること五年、遂に大悟することが出来たのである。



その後、京都に上り、竜華院りゅうげいんの無着和尚むぢやくに、東福寺とうふくじの象海和尚ぞうかいにそれぞれお目に掛かり、種々学ぶところがあつた。このようにして曹源さまは十七年間、あちらこちらと雲水修行され、その留まられた各道場では常に高位にたてまつられた。しかしその後、飛ぶようにして松島に帰り、江南和尚に参禅してついにその法を嗣ついでがれたのである。

石巻で修養

享保一八年（一七三三）の春、曹源さまは三十二歳で妙心寺の第一座（住職となる最初の資格）となられ、石巻の山下に新しく竜華庵を建て、そこに七年間籠こもつて修養された。その間、食事の時以外はひたすら坐禅と誦經に専念せられたのである。元文四年（一七三九）一月二十八日の夜、曹源さまは次のような夢を見られた。

竜華庵の前には井戸があり、その井戸に曹源さまが落ちてしまった。すると水の底から白い眉の老人が現われ、両手をひろげて救ってくれたというのである。夢から覚めても、しばらくは胸がときめいたという。二、三日して易者がこれ



を聞き、これは大変おめでたいしるすですといった。

この年の春、三月二十八日、藩主・伊達吉村公の命によって、曹源さまは三十八歳で天麟院^{てんりんいん}に住職せられた。易者の言葉が的中したといえる。十五年間住職の後、次の伊達宗村公の命によって陽徳院^{ようとくいん}の住職となられた。

瑞巖寺へ住職

曹源さま五十八歳の時、すなわち宝暦九年（二七五九）桃園天皇の勅請によって京都に上り、妙心寺住持の式をあげ、紫衣^{しゑ}（最高位の法衣）を賜った。

宝暦十年（二七六〇）前年に松島瑞巖寺住職、大巖和尚^{だいてん}がなくなったので、伊達重村公は曹源さまを瑞巖寺にお迎えしたのである。九月十四日、その入寺開堂の式を挙行した。そして山門では次のような偈頌^{げじゆ}（禪の詩）をとなえた。

尽乾坤大地^{じんけんこんだいち}

一箇の解脱門^{げだつもん}

擬議ぎぎすれば三十棒

諸人 脚跟きやくこを転ころぜよ

天地いっばい、宇宙いっばい

これこそ唯一のお悟りの門である

まごまごすれば、それ三十棒だ

諸人よ、お前自身の足で踏みこめ

再び妙心寺へ

明和五年（一七六八）今度は後桜町天皇の勅詔により、第二回目の妙心寺住持となり、再び大いに宗旨を挙揚こようすることになった。宗門一同、その人格のもと、修行の場を一層厳粛にしたのである。翌年、



五

例に随つて朝廷に上り、天皇に拝謁し、ねぎらいの言葉を賜つた。

今回、妙心寺へ入寺の日、夕暮に見麼軒けんもの庭で物音がした。弟子の一人が明りをもつて見に行くと、一匹の亀がいた。すると曹源さまは

「決して不思議なことではない。わたしがこの前の妙心寺入寺の時、堀川のあたりを通つたが、二三人の子供等が亀をつかまえていた。そこでそれを買ひ求め、玉鳳院ぎよくほういん前の鏡容池に放つてやったことがある。およそ亀は昔から吉凶を占うとされている。今ここへやつて来て祝意を表し、かつての返礼に來たことは明らかである。これは決して偶然とはいえないのではないか」

といわれた。そこで僧達も在家の人達も一同そのおめでたい出来事を讚美した。妙心寺住持の任期が無事終了し、いよいよ退山の日、太鼓を三つ打ち、肩に拄杖しゆじやう（つえ）をかついで退山されたが、その時、次のような偈頌を唱えられた。

名藍めいらんに承之しやうしし住山と称す

従来 貧道ろうちの老癡頑がん

只だ一滴 曹源の水を将^もって
ひやくかえんり
百花園裡に注ぎ得て還る

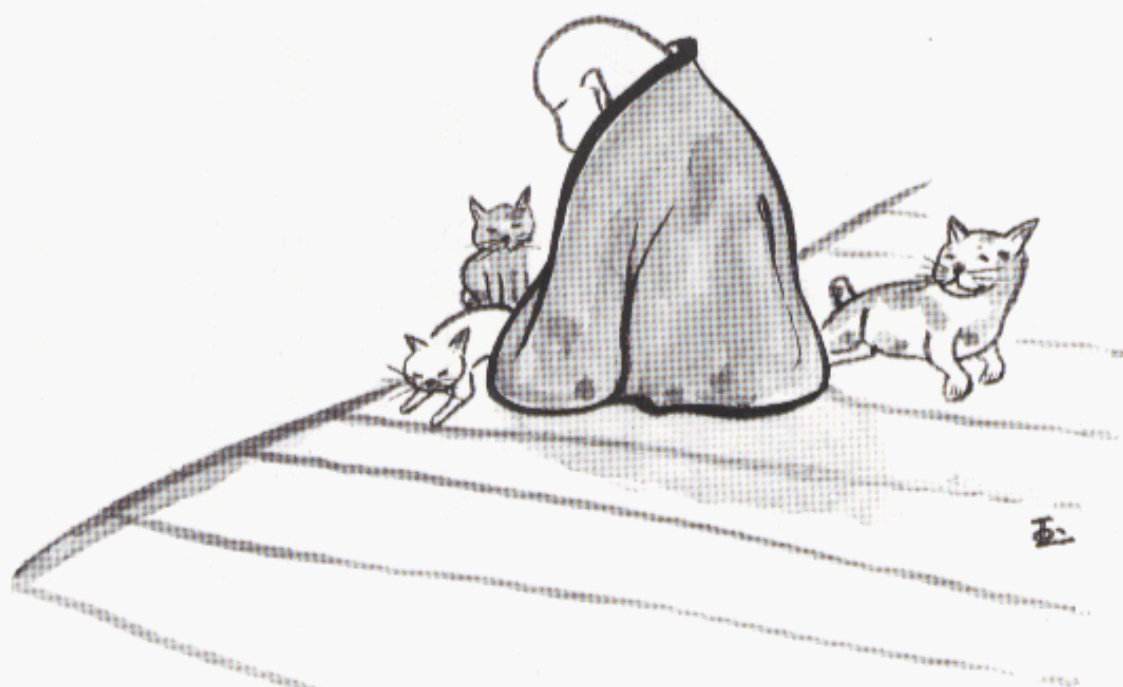
天皇の勅請によって名利に住持したが、もとより私は未熟なぼけおやじにすぎぬ

ただ仏祖から伝えた一滴の仏法のしずくを

この花園(妙心寺)に注いで還るだけだ

猫の好きな和尚さん

松島に帰られた曹源さまは六十八歳になつておられたが、それでも坐禅や誦^ず經^{きやう}を皆と一諸にして一日も怠ることなく、



また修行僧の指導にあたつては大変きびしく、三、四十歳の頃と少しも変られなかつた。

曹源さまは一生の間、一滴の水をもそまつにせぬよう誓われた。また四箇所に住職される間、決して威儀を乱さず、坐禅や誦經のほかには、ほうきを持つて部屋や庭などの掃除をいつもされた。

また猫を大変可愛がり、常に飼つておられ、ある年に次のような偈頌をつくつておられる。

壁間へきかんに掛在かざいす七尺の藤とう

従来しゆじやう 宗乗しゆじやうを挙こするに力なし

東風日暖かにして春睡を催す

三箇みようの猫児みようじと一箇の僧

壁に一応しゆじやう拄杖をたてかけてはいるが

もとより私には宗旨を挙揚する力はない

やわらかい東風と暖い春日のもと

三匹の猫と一人の僧がうつらうつらとしているだけだ

曹源さまがこのように特に哀れみ深いおかたであつたことは、何かの因縁であらうか。藩主、伊達重村公は、一年おきに松島へ来られ、曹源さまについて禅を学んだが、その応対ぶりにはすっかり御満足のようであつた。

東園寺の復興

さすがの曹源さまも、永らく瑞巖寺で人々との応接にお疲れになつたとみえ、隠退しようとした。そこで当時衰頹していた塩釜の東園寺を復興し、本堂や庫裡を新築されることになったが、それもわずか四年で、すべて美しく立派に出来上つた。それは曹源さま七十九歳の時のことであつた。

ただちに役所に報告をし、東園寺に隠居された。そこで藩主は毎年役人に命

じ、数石の年貢を贈らせ、隠居生活の助けとした。また時々青葉城に招待し、御馳走したり歓談したりして、ますます信賴が深くなった。特に和歌数首を贈られたが、その中の二篇は瑞巖寺の宝庫に珍藏されている。

天明四年（二七八四）の九月、曹源さまは病氣になられ、弟子達はすばやく集まり、藩の医者が診察した。その病氣は翌月になると一度良くなった。しかし御自分ではもはやなおらぬことを予知し、薬を飲まれなかった。

遷

化

天明五年（二七八五）三月二日、曹源さまは看護の弟子に命じて沐浴し、頭を剃らせ、衣を更^かえて坐禪用の椅子に坐り、一同をあつめ、死後の事を依頼して別れの挨拶をされ、そして次のような遺偈^{ゆいげ}（死にのぞむ禪詩）を書かれた。

曹源の一滴

滴々流通す

出生入死しゅつじゅうにゅうし

柳は緑 花は紅

仏祖が伝えた一滴の仏法のしずくは

今の私にまで流通している

生れるのも 死ぬのも

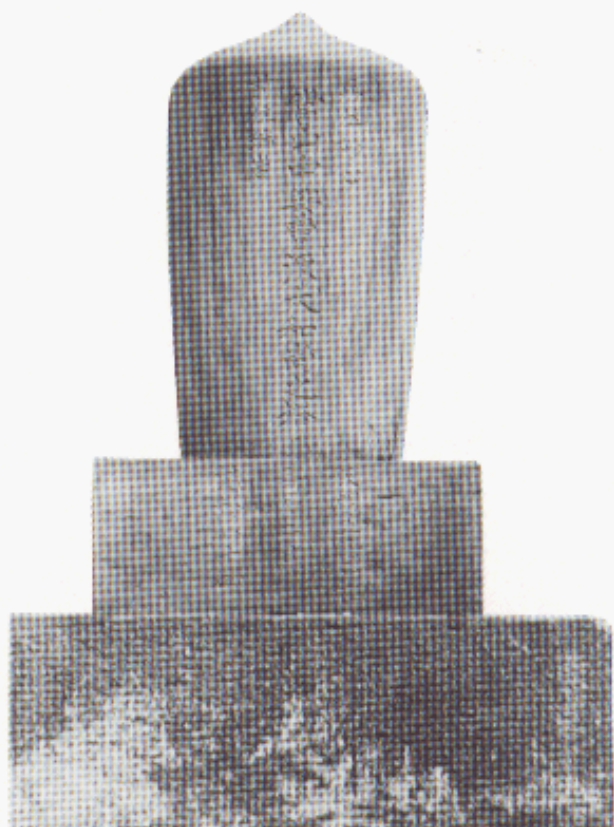
柳は緑 花は紅

筆をほうりだし、安らかに遷化せんげ(亡くなられること)されたのである。御年八十四歳、僧籍七十七年であった。棺を七日間そのままにしておいたが、おだやかな顔は豊潤で、さながら生きておられるようであった。

その野辺送りには、土地の多くの人々が、香花をもって礼拝をするため、次々とやって来ては先を争うほどであった。そしてその遺体は松岩山にうずめられた。お墓の名を靈照塔という。

曹源さまの法を嗣いだのは、たいようそうじ岱陽宗璽和尚、ばいえいそしん梅英祖信和尚、りゅうしんえかつ龍津慧活和尚の三人であり、得度の弟子は数人であった。遷化の後、法類の僧侶達はその懿徳いとくをたたえ、曹源さまを東園寺中興の祖とした。その他種々な事を書き出せば限りがないので、謹んでその行実のあらましのみを書きとどめる。

天麟院に寓居する法孫の瀛洲えいしゅう慧枢えすうがつこ欽んでこれを記す。



曹源和尚肖像画の讃

三斑 貴を蒙つて能く愛を知る
 膝上に頭を昂げ 尾巴を弄す
 垂手にして却つて泉老が作に優る
 敢て殺活を論じ 誼譚せず

現松島山主 叔丹源拜賛

三毛猫が可愛がられて深い愛を知ることができた
 (和尚は)いつも膝の上に抱きあげ、頭をなでたり尻尾をなでたり
 その柔軟な態度は、南泉和尚が猫を斬ったはたらきよりも優れている
 やむを得ず殺人刀・活人剣の話はするが、それ以上やかましくはいわぬ
 瑞巖寺住職 丹源文叔 謹んで讃の偈頌を拜書申し上げる



大本山妙心寺鐘銘（曹源和尚作）

曹源和尚さまが大本山妙心寺の釣鐘のために作られた鐘銘（つりがねを賞讃した漢詩）。なおこの鐘銘は今回東園寺に新しく造られた釣鐘の銘として転写されています。

深般若力 深般若の力もて

深遠な智慧の力で

鑄就金童 金童を鑄就す

釣鐘が出来上った

大哉法器 大いなる哉法器

この大いなる法のうつわは

仏運紹隆 仏運を紹隆す

仏法を興隆させる

善矣功德 善なる功德は

又そのすぐれた功德は

皇図安豊 皇図を安豊にし

国政を安らかに豊かにし

驚悸魔外 魔外を驚悸せしめ

悪魔や外道を屈服せしめ

警発盲聾 盲聾を警発す

仏法の眼を開かせる

鳴関山月 関山の月に鳴り

この鐘声は関山（関山様の名で妙心寺派を象徴する）の月に響鳴し

伝微笑風 微笑の風に伝う

微笑（関山様の塔名）の風と共に伝え来り

礼楽俱具

礼楽俱に具わり

祥瑞兼同

祥瑞兼ね同る

式成勝果

勝果を式成し

以証円通

以て円通を証す

洪音万歳

洪きく万歳を音い

祝寿無窮

無窮を祝寿す

礼も楽もそなわって

おめでたい事がすべてあつまる

そして正しい智慧をもちい

自由自在にはたらいてゆく

大きく万歳をとえ

仏法の弥栄をお祝い申し上げる



東園寺復興寸感

東園寺住職 千坂 精道

子供のころ、先住さんが私を東園寺歴代の住職が眠る墓地へ連れて行き、一番まん中に立つ塔を指して、この和尚さまは、本山の妙心寺に二回も住持されたえらいお坊さんだと話してくれた。

小学校に私が入学する前の東園寺は、今の東園寺から国鉄の線路を一つへだてた小高い丘にあった。慶応三年二月六日の塩釜大火で全焼したため、塩釜神社の別当寺、法連寺の護摩堂をゆずりうけ、仮堂として移築したそうである。法連寺は明治初年の廃仏棄釈で廃寺となり、多くの堂宇が取りこわれたので不要となった堂を頂いたのであろう。

現在の東園寺は、当時のどん底にあった廃寺同然の寺をしのぶことは出来ない程の復興ぶりをみせている。先々住さんのころは、仮堂生活が五十年も続くのである。先住さんも引き続き十年近く仮堂生活が続いている。私は本堂庫裡を兼用した仮堂で生まれ、小学校へ入学する直前まで、仮堂で育った。裏千家にいる弟の秀学は、現在地に復興した東園寺本堂建築の木小屋で生まれたそうだ。

明治から大正にかけての東園寺は、カイコをおき、ブタをかって生活の足しにしたという。その頃の寺籍台帳が本山にあるが、「六等地一級 本堂、庫裡 別に無し」とある。まったくの仮堂であったことが記されている。

先々住さんの晩年、宮城電鉄が仮堂側の土地を路線として買収し、東園寺復興の資金としてまとまった金が入ったが、七十を過ぎた先々住さんは、若い後継者の考えで寺は復興して頂く、といって先住さんに後事を託して、復興資金をそのまま遺して遷化されたのである。

現在の東園寺本堂は先々住さんの遺命をうけて先住さんが焼けない寺をという悲願のもとに当時の総代達と相談して、東北最初の鉄筋コンクリート造りにした。総代、檀徒の中にはコンクリート造りに絶対反対の意見が大多数で、「生意気小僧、退山せよ」などという投書が寄せられたとも聞いている。二十代の青年住職であった先住さんを、若い総代であった小松寿右衛門さん、檀頭佐浦昇太郎さん等の近代的な感覚のあった支持者がはげまし、当時、日本最初の鉄筋コンクリート寺院として建築中だった東京築地の本願寺建築工事現場に総代たちが先住さんと共に視察に行ったという。本願寺の工事現場で、超モダンなセイロン風の本堂をみた老総代たちは、その頃の人たちにとって異様ともいえる建物にびっくりし、「塩釜にこんなものは建てられない、オッさん、コンクリートはやめろ」という意見が多数であった。学生時代、京都の南座の建築が鉄筋造の日本様式であったことを思い出した先住さんは、「では、せっかく東京に来たのだから歌舞伎を観て帰ろう」と提案し、築地の歌舞伎座に行ったところ、この芝居小屋が日本様式の鉄筋コンクリートであった。「オッさん、コンクリートでも日本式で出来る、この造りなら賛成だ」ということで現在の桃山式御堂造りの鉄筋コンクリートの本堂ができたのである。しかし、戦争で、

寺の廻りが焼野原となった昭和十九年のB29の空襲まで、檀家の皆さんからは良い評価はされなかったようだ。寺の本堂が焼け残って十余年ぶりにその先見が評価されたのである。

このたび、曹源和尚さんの二百年大遠諱と本堂再建五十年慶讃法要が行なわれるに当り、祖霊堂、仏舍利殿、祖師堂を兼ねた三重塔と幼稚園新築、曹源和尚ゆかりの大鐘と鐘楼建築という総額二億五千万円余の遠諱事業を檀信徒皆様のご協力により、成し遂げ慶讃大法要を営むことができることは当職一世一代の光栄であります。

ここに貧しかった時代の東園寺と、曹源和尚さん時代の東園寺に復興しようと努力した積年の僧俗一体の努力を想い、瑞巖寺宝庫にあった曹源和尚行状記、語録を花園大学禅文化研究所に託し、子供の頃から東園寺世代で一番えらかった和尚さんと、先住さんから教えられた曹源和尚さんの行状を檀信徒有縁の皆様にお贈り致します。

この小冊子を作るに当り、資料を提供して頂いた瑞巖寺博物館、禅文化研究所、妙心寺派宗務本所の有志の皆様のご協力に対し、一々名前を記すには余りに数多くの方々からご協賛を頂いたので氏名は略しますが、厚くお礼申し上げます。

昭和五十六年四月二十九日

瑞巖百十世
妙心三百九十九世

東園中興・神通妙用禪師曹源大和尚年譜 (中島義観編)

年	号	西 曆	年 令	行 状
元禄十五年十月五日		一七〇二		松島、桜井家に誕生。
宝永五年		一七〇八	七歳	
享保三年		一七一八	十七歳	天麟院燈外和尚に就き得度。 思を南詢に寄せ、東都に到り、己庵東禪に禪籍を学び、更に定山駒の光福を経て、豊後多福の西江和尚に参じ、遂に日南に到り、古月和尚に侍すること五年。
享保七年		一七二三	二十二歳	京に上り、妙心の無着、東福の象海両和尚に参学。この間十年。
享保十八癸丑年春		一七三三	三十二歳	京より松島に帰り、江南和尚に参じ印可を受け、法山第一座に転ず。志を立て松島を出てより実に足かけ十七年振りのことなり。
元文四年一月二十八日		一七三九	三十八歳	それより石港山下に龍華を営み、長養すること七年。立志南詢より足かけ十七年。 この夜夢に庵前の井戸に落ち、老翁に救わるを見る。卜者、これを吉祥と告ぐ。
同年三月二十八日		全	全	はたせるかな、太守吉村公の請により天麟院に住することとなる。足かけ十五年。

宝暦二年	一七五三	五十二歳	藩公の請により陽徳に転ず。
宝暦九年	一七五九	五十八歳	桃園帝の詔により、妙心に視篆。
同年九月	全	全	陽徳に帰り、続いて瑞巖に住す。
明和五戊子年	一七六八	六十六歳	再び輿請により妙心に住す。
明和六年	一七六九	六十七歳	禁裏に朝し天顔を拝す（後桜町帝）。 六月、天授院前大鐘鑄造銘を誌す。
明和七年	一七七〇	六十八歳	妙心より瑞巖に帰る。
安永五年	一七七七	七十五歳	多賀城出城、駒犬城跡において寛文年間に荒廃したる元建長寺 派東園寺復興に着手。
安永九年	一七八〇	七十九歳	東園寺完成。公府に告げ東園寺に引退。
天明四甲辰年	一七八四	八十三歳	発病
天明五乙巳年三月二日	一七八五	八十四歳	示寂

付 記

東園寺は再興より八十七年して、慶応三年（一八六七）塩釜大火に罹り焼失し、ただ東園寺碑を残すのみであったが、昭和六年（一九三一）再々興、今日に到る。